

信樂の天地とは

乙「はつきりお答えなさい。あなたは、人間に生まれたことをよろこんでいますか。」

乙「あなたは、あなたが、あなたであつたことを、よろこびますか。はつきり、そうか否か、お答えなさい。」

甲「……………」

乙「ある人は信に徹底したと言っていました。しかしその下からすぐ、貧しいことを呪いつつ、つまらなくあきらめられていると言いました。しかし、信は安価なアキラメの道具ではありません。ある人は念仏しています。問うて見ると、私はお人好しで、たびたび他人に欺かれてなげけない。せめてお念仏でも申したらと吐息しました。しかし信仰は仁丹ではありません。ある人はお慈悲がありがたいと言いました。しかしその下から、私は不具であるから世が狭い、女に捨てられて今も失恋に悩んでいると言いました。失礼ながら、念仏は失恋の慰安所ではありません。恵まれた恋ができたら、この人の信はなくなるでしょう。動機は何であつてもいい。しかしそんな世界はまだ信樂の天地ではない。」

甲「では、信仰の世界には呪いも瞋りも愚痴も後悔もないと言うのですか。」

乙「そんなことをいつ言いました。火があたれば熱いのです。氷があたれば冷たいのです。」

甲「私にはさっぱりわかりません。二つの問いを出された時から、私の信仰は壊れました。」

乙「壊れたものは金剛ではなかつたのです。よいことでした。」

甲「私はどうしても善人にもなれないし、悪人にもなれないのです。」

乙「この上、なお、型にあなたを入れて苦しめますか。悪人になつて何とします。善人になつて何とします。そうした先にまだ魂胆があるでしょう。」

甲「それでも聖人は悪人だ、愚禿だと言われたではありませんか。」

乙「聖人のまねをして何とします。それであなたの求道は本格的だと思つていいのですか。世には、私は悪人だ、そこを救つてくださるのがお慈悲ですと言つていられる者があります。糊がはいつていなくなつたら結構です。道理で力も生活もありませんわい。」

甲「それでも、肉食すればものの命をとるようですし、商売すれば偽りも言うようです。私たちがしていることは全部が罪と聞きますのに。」

乙「そんな罪悪観なら、涅槃だの、大乘だのと言わなくても成立いたします。そんな寄せ木細工が何になります。」

甲「それでも聖人は無限の生死界を見て悲観せられているではありませんか。」

乙「そうです。至心積にも、信樂積にも、欲生積にも『一切群生海』を発見していられます。しかし、聖人はけつして信樂の天地において、あなたのような、何かまだ足りないあるものを持つてはいられません。満足、大悲、円融、無碍の天地に満たされ



しました。その穴をどうにかするために早くなげ出さないでいろいろと当面をごま化すために、さまざまな工面をしてやりくりをします。いよいよいけなくなり、いけなければいけないだけ、いけるようにしようと思ひます。信用を落とすまいとして表をはったり、苦しい内状を包むために無理をしたりして、いよいよという所まで一人で苦しみつつも姑息な手段を使います。こうした行きがかりになると、ところまで行って、ニツチンもサツチソも行かなくなるまでは目はさめません。どうにも甲「私がそれだとおっしゃるのですか。」

乙「そうです。そうした心の時ほど、苦しい暗いものはないでしょう。することもなすことも一つとして生きたことはありません。心の中には空虚があります。生き方は死んでいきます。抽象的です。偽善的です。そしてその全体が高慢です。考えて見れば見るだけ、いやな暗い世界です。」

甲「おっしゃる通りです。ですからどうにかせなくては行かないのです。」

乙「まだ余裕があるのです。どうかせられる間なさいませ。」

甲「それは先生が私をつきはなしなさるのです。つきはなさないで教えてください。」

乙「また出ましたね、このままが。それは言葉ですよ。自力や疑いは、けつしてこのままと握ることによつて解決はつきません。このままも棄てなさい。聞いた話にも合いません。男であることも女であることも、悪人も、善人も、智者も、愚者も、長い間聞いたのも、聞かないのも、そしてその他一切が間に合いません。あなたはさまざま相を出して、これでいいのか、これで間に合うのかと浮身をやつします。その諸相の一切がだめです。」

甲「では一切が間に合いませんか。」

乙「そういうその言葉すらが間に合いません。」

甲「……………」

乙「親鸞聖人は、自然の浄土と言われました。如来は真如界からのみ示現します。自然、真如、それは万々の現象それ自体に即して実在する、久遠実成の唯一絶対です。ただ具体的な『一』であります。この一の中から絶縁されたる何ものもないのです。色即是空、平等即差別、一即多、すべて万有の一体を語らないものはない。一の血に燃えている具体的な独立です。有をはなれ、無をはなれ、足すことも、減ずることもできない、完全それ自体です。一義諦というのがそれです。実相、法性、法身、滅度、涅槃、無為、真如、一如、言葉は変わつても、この独立自全の一をさして言ったのです。」

しかるに高慢なるわれらは、はからうべからざるにはからい、名づくべからざるに名づけ、足すべからざるに足し、知るべからざるに知り、疑うべからざるに疑い…………… この莊嚴されたる自然の浄土を知らずして、なおも善悪、賢愚、淨穢の分別にさ迷い、具体的なこの全一の恵みを知らずして、私に我の見を立てて、われをこの一体より抽象し、対立して、いよいよ深き迷妄の淵に沈もうとするのであります。

しかるにこの我の迷妄にさめた聖人は、大無量寿経によって、新しき世界の展開を信仰したのです。」

乙「私は長いこと一人で語りました。」

甲「続けてお話ししてください。私は何だかすべてが打ちくだかれた後に、微かな光を拝むような気がします。私はお話を聞いている間に、私の過去の求道がたいへん間違つた邪道におちっていたように思われます。そして多くの求道者が邪道におちているのではないかと考えはじめました。」

乙「そうです。信一念は全的なものであつても、その過程は複雑な道であります。間違いは出て見なければ、まちがいと知れませんが。哲学的な理論が少しわかるとそれをふりまわして、一かどの宗教学人でもあるかのごとく高上りします。おそらくこういう時がいちばん我慢の最高峰にいる時です。しかしそれは、自分が現実、実践している醜い現実にくれた時、崩れてしまいます。醜い現実を忘れて、頭だけ、声だけが理窟を言っているのは、ほんとは魂が死んでいるのです。麻痺しているのです。あるいはまた、自分の醜い相をごまかしている人があります。それは自分のグウダラな相や日暮しを、如来の悪人正機の教義をもつて、言いわけに使っているのです。もちろん悪人が救われることに間違いないのですが、徹底しないのです。言い変えると如来の慈悲にあまえて、おもちゃにして、そのいやな日暮しをごまかすことによつて、やつと胸をなでおろしているのです。しかしそれは信仰ではなくて、自己欺瞞であり、妥協であります。いかに多くの人が、この甘味を法悦？ に似た空気の中で、妥協の悪酒に自分を忘れていくことでしょうか。」

甲「そうです。私もまた、その種類の一人でありました。長い間、私の心の底の不安をば、一時の感激の中にごま化していたことでしょうか。如来の本願に乗托したのではなくて、み教えによつて自分の都合のよいように、自分の悪さを言いわけしていたのです。その我執我慢の根城をつかれて私は一時は腹立たしい心にさえなりました。」

乙「知らぬ間に、長い間、聞きため覚えたことが、鼻高天狗になる材料になつて、如来を見失い、自分を見失い、そして化城に立てこもつて、本願の白道を失います。」

甲「私がそれだったのです。しかし私はすべてをもちとられただけで、何もありません。なくされたままでもいいのでしょうか。」

乙「いいのでしょうかと問われますが、あなたに問い返します。それでいいですか。」

甲「いけません。」

乙「如来はあなたを呼びかけています。真実、清浄、絶対の彼岸からあなたを呼びかけています。」

甲「何とよびかけています?」

乙「南無阿彌陀仏によつて救うと。」

甲「南無阿彌陀仏によつてですか。」

乙「何ですそれは……………」。名号はあなたを救うという如来本願の表現です。如来の誓いはあなたを救うの誓いです。本願の名号は、あなたをありのままに救うという如来大悲の表現であります。名号の中にのみ救いは成就されてあります。そして現実の具体的動きが本願です。」

甲「でも私はいよいよ助からぬ存在であります。悪を悪とも思わず、善を善とも求めない……………」、覚めてくれぬ、蛙の面に水です。」

乙「よいことにお気がつきました。覚めたと思ったのも、よくなったのも、知ったと思つたのも、そしてその他の一切がみな永遠なるものではなかつたのです。そらごとの相にすぎなかつたのです。曲がつた松を直いと見るのではなくて、曲つたを曲つたと見るのこそ、真直に見たのだと聞くではありませんか。ありのままを……………一時的に装われた相、ハク車をかけた状態が信仰ではない。自然の相で救われます。」

甲「しかし私は救われた姿ではありません。」

乙「そこへ、昔のようにお慈悲を持ち出して妥協することもできません。」

甲「それできません。しかし私はまだどうにかなりたいのです。」

乙「なつてごらん。」

甲「……………」

乙「もつと部分的改造をやりませんか。悪から善に、愚から賢に、穢から浄に。……………ね。やりませんか。」

甲「それは私の傲慢です。それは如来をぬきにした。高慢なはからいです。」

乙「それでは、あなたはどうします。」

甲「……………」 行きづまりました。」

乙「南無阿弥陀仏 ………………」 (しばらく沈黙)

甲「わかりました。ありがとうございます！ わかりました！」

乙「わかつたのを何とします。」

甲「わかつた心には用事はありません。私は長い間、私自身の我慢にだまされていたのです。もう私は奴にだまされはいたしません。」

帰命無量寿如来

南無不可思議光

はじめてびたつとわかりました。ああ。ただ如来のみです……………。私が帰命だの、南無だの、信ずるだの、という前に、如来が生きて、生きて生きぬきたまう世界でありました。」

乙「生きた血潮！ 動く生命！」

甲「私は全く如来を固定化し、死物扱いにしていました。だから私の傲慢をつのるか、罪悪の言いわけか、宿命観かを一步も出ることとはできなかつたのです。」

乙『歎異鈔』にいわく『罪悪も業報を感じることあたわず、諸善も及ぶことなきが故に……………』

甲「今こそ、私は広い世界を知らされました。初めて聞きました聖人の世界がうなづけます。悪人とさめ、そして如来をひきよせ、信をつくつて…………… そんな世界ではなかつたのです。如来の信にまるめられた、大きな無限の大信海、安心して泣かれます。安心して笑われます。」

乙「信は願より生ずれば、念仏成仏自然なり。(和讃) 能く清浄の願心を生ずと云うは、金剛の信心を獲得するなり。本願力廻向の大信心海なるが故に破壊すべからず。(信巻) ただ念仏申しましよう。」

甲 「こわれつくしたものに、再びこわれるものはありません。金剛とは、すべての相をはなれた如来のことなのです。その如来心そのままがこの念仏となってくださったのです。」

乙 「輝かしいあなたのお顔だこと。」

甲 「私は私の過去三十二年が全くだめであったことがわかりました。今からです。これからです。これから導かれて歩ませていただきます。導いてください。」

乙 「食物を嘔吐していたのでは、滋養にはなりません。腹が食物を受けつけはじめるといよいよ味が出ます。これから条件やお役目や、功利主義のつかない求道にいそしみましょう。」

甲 「私は大安心境に出されましたのに、これからだ！という気がします。広い広い未来が見えるようです。私はもう………今までの私ではありません。私は芽をきつたばかりの二葉です。赤子です。でも力にみちた赤子です。両手をさしのべて生きられます。ありがとうございます。」

乙 「強く強く一歩ずつを如来とともに歩みましょう。あなた自身を尊重なさい。全我をささげて生きぬきましょう。ほんとにありがとうございます。」

甲 「ほんとにありがとうございます。私はじつとしてはいられませぬ。ではおいとまします、………お大事に。」